



# CENTER NEWS



左下：カザフスタンの伝統家屋 ほか：カザフスタン国立医科大学の臨床教育風景と卒業式

## Contents

● <b>モンゴル出張報告</b> ..... 2 講師 大西 弘高	● <b>第 44 回日本医学教育学会大会</b> ..... 5 教授 北村 聖
● <b>サウジアラビア出張報告</b> ..... 3 講師 大西 弘高	● <b>ヨーロッパ医学教育学会 2012</b> ..... 5 講師 大西 弘高
● <b>第 15 回オタワ会議出席報告</b> ..... 3 教授 北村 聖	● <b>臨床診断学実習（模擬患者による医療面接実習）</b> ..... 5 講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝
● <b>NEJM 200 周年記念式典</b> ..... 3 教授 北村 聖	● <b>模擬患者つつじの会</b> ..... 5 講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝
● <b>マヒドン大学職員視察受け入れ</b> ..... 3 講師 大西 弘高	● <b>東京大学医学教育セミナー</b> ..... 6 講師 大西 弘高
● <b>カザフスタン出張報告</b> ..... 4 講師 大西 弘高	● <b>医学教育基礎コース</b> ..... 6 講師 孫 大輔
● <b>AMEWPR 出張報告</b> ..... 4 講師 大西 弘高	● <b>着任あいさつ</b> ..... 7 講師 孫 大輔
● <b>WONCA 参加報告</b> ..... 4 講師 孫 大輔	● <b>ウォン先生自己紹介</b> ..... 7 特任教授 ジェフリー・ウォン
● <b>中国福建省立病院看護管理者研修</b> ..... 4 教授 北村 聖・特任専門職員 田中 紫	● <b>センター日誌／編集後記</b> ..... 8

# モンゴル出張報告

講師 大西 弘高

大西は、JICA モンゴル国保健セクター情報収集・確認調査において、保健セクター分析専門家として3月19日～4月11日（24日間）、5月2～12日（11日間）、6月18～27日（10日間）の3回渡航した。モンゴルは、近年鉱山事業の拡大等により、経済はかなり上り調子であり、旧ソ連型の社会システムからの改革が進んでいる。モンゴル保健科学大学（Health Science University in Mongolia: HSUM）は、医学教育において国際的な外部評価を受けるなど、国際標準に向けた取り組みが盛んである。ただ、今回の業務は医学教育のみならず、保健セクター全般に及ぶため、これまでになく業務経験となった。

8月末現在、報告書の最終的なとりまとめ作業中である。報告書の主な内容は、①関連開発政策、②保健行政、③保健医療制度、④保健医療サービスの状況、⑤健康の状況、⑥医療人材、⑦アジア開発銀行による「保健セクター開発プロジェクト」という括弧を持つ。私は主に⑥についてまとめると共に、①～⑤についても補助的な形で携わった。ここでは、順序を若干入れ替えて、概要を示したい。

## <国の概要>

日本の4倍の国土面積だが、人口は280万人強と少ない。言語はモンゴル語で、ロシア語と同じキリル文字を使っている。一人当たりGDPは2,562USD（2011年世界銀行）。ロシア、中国、韓国、日本などとの関連性が高い。モンゴル系民族が大半を占め、人口の半数強が首都ウランバートルに集まっているが、地方では遊牧民もそれなりに残っている。5畜と呼ばれるヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダが遊牧されている風景は、地方に行くとき日常的にみられる。行政区域はウランバートル市と21の県に分かれる。

## <保健医療制度>

ウランバートル市内には、国で唯一の国立大学医学部を持つHSUMがある。また、3つの中央病院や母子病院、感染症センターなどの3次施設が約20カ所存在する。2次施設は地区病院、1次施設は家庭医療保健センター（Family Health Center: FHC）と呼ばれ、低次施設から高次施設へと患者を紹介するシステムも出来上がっている。

地方には、4つの3次病院（地域診断治療センターと呼ばれる）があり、3次病院がない県には、1個ずつ県病院と呼ばれる2次病院がある。1次施設は、県庁所在地ではFHC、それ以外の村域では村保健センター（Soum Health Center: SHC）で構成される。

## <健康の状況>

ミレニアム開発目標の4～6に関しては、いずれもターゲットとなる数値を2015年には達成できる見込みである。出産前ケアは1次施設で適切に実施され、出産はできる限り県庁所在地の病院に集中させるなど、人口密度が低い国ならではの効率的な方策がとられている。感染症は、麻疹、ポリオ、ジフテリアなどについては、予防接種が奏功しているが、結核、A型肝炎、性感染症（トリコモナス、淋病、梅毒）についてはコントロール不十分である。低栄養の問題はかなり解消されつつあるが、都市部を中心に肥満

率が高く、非感染性疾患が急増している。

## <医療職の役割と人材育成>

医師数は人口10万人あたり280人と先進国並みだが、この数値には歯科医師や伝統医学医師も含まれており、実際には250人弱である。看護師数が医師数の1.2倍しかおらず、看護師不足解消が大きな課題となっている。1次施設においては、予防接種、各種健診、健康増進などの予防活動と共にペーパーワークが多い。1次施設ではX線、各種臨床検査がほとんどできないため、少し複雑な病状に関しては、すぐに2次、3次の病院に紹介が必要となる。医師はかなり専門分化が進み、7割程度の医師は専門医研修を受けているが、研修期間が1～1.5年ととても短い。そのため、診療レベル向上が難しい。

医学部は6年制であり、臨床前教育は行き届いているが、臨床実習の経験は弱く、卒業すぐに現場に出ても、しばらくは業務がおぼつかない。卒業後2年間は1次施設で働くことが義務づけられているが、10人強へのインタビューで誰一人としてこの制度を快く思っていなかった。

その他の医療専門職は、人数が少なく、まだ認知度が低い。医療系の私立大学が6つあるが、西洋医学の医学部はアチェ医科大のみである。

現在、保健指標が特に悪いのは、地方の遊牧民世帯と、ウランバートル近郊のゲル地域である。ゲルとは、遊牧民が用いる容易に移動可能な住居で、地方で職に困った者たちが、首都近郊にゲルを配置して移り住んでいることを示す。結局、医療サービスへのアクセス、貧困、遊牧というライフスタイルなどが、モンゴルの保健に関する課題と言えるだろう。

地方にまで予防医学を中心とした比較的行き届いた保健サービスが提供されていることが、各種保健指標の改善につながっていることは、プライマリヘルスケアの重要性を改めて認識させるものであった。一方で、2次、3次の病院において、専門性の隙間が出来たり、混雑がひどすぎて受診ができないなどの不満はあり、周辺諸国へのメディカル・ツーリズムも課題になっている。急速に経済がよくなっているだけに、医療をどの階層の人々に向けて提供するのかがといった難しい課題が浮上していると言えるだろう。



▲ 臀部熱傷治療中の幼児



▲ 注射実習中の看護学生

## サウジアラビア出張報告

講師 大西 弘高

私は、2012年4月22～26日にリヤドで開催されたサウジ国際医学教育カンファレンス(The Saudi International Medical Education Conference)に招聘された。この学会は、サウジアラビア国内で隔年で開催されているが、海外から30名が招聘される大規模な学会であった。私は、「判定基準設定」、「総括評価のポートフォリオ」の2つのワークショップ、「よい評価とは？」のシンポジウムに出ることになったが、いずれのセッションも熱心な討議が行われて、印象深いものとなった。

会場には、ITを駆使した教育ツールのブースなども出ており、教育への投資は盛んなことが窺われた。これは、他の産油国と同様、やがては枯渇するかもしれない石油依存の経済から、将来変化が起こるかもしれないことを見越した対応なのだろう。町中には、きらびやかなビル、ショッピングセンターが立ち並ぶ一方で、南アジアを中心とした国々からの移民の多い地区もあり、労働者を確保すると共に、治安や健康の維持といった課題にも取り組んでいかなければならないこの国の事情を垣間見た。町中に案内してくれた医学生は、将来の留学などの夢を語り、この国の将来が楽しみにになったひとときであった。



▲ リヤドのビル街(学会パンフレットから)

## 第15回オタワ会議出席報告

教授 北村 聖

2012.3.8(木)～3.12(月)にマレーシアのクアラルンプールで開催されたオタワ会議に出席してきた。オタワ会議は医学教育の中でも評価の研究を語り合う会議として最初にカナダのオタワ市で開催され、その後はどこで開催してもオタワ会議と呼ばれている。2年ごとに開催されており、今回は、第15回でマレーシア国際医学大学(IMU)が共同主催であった。IMUは大西講師がかつて勤務した大学であり、また元客員准教授のヌージャハン・イブラヒム先生の勤務先でもある。

会議の参加者はそれほど多くなく、500名くらいであったと思われる。ワークショップや教育講演が多く、一般演題は他の学会に比べて非常に少ない。残念ながら、日本人は経済力に比べて参加人数は少なく、今回もせいぜい10人くらいだった。そして、日本人は割りと自分の発表以外は、あまり顔を見ず、またほとんど質問しない。国際学会の中で日本の果たす役割というもののをいま一度考え直さないと、大学のグローバル化は遠い未来の話になってしまふ。9月入学のみならず、いろいろな対策を取らないと日本の地盤沈下は収まりそうにない。



▲ 会議風景

## NEJM 200周年記念式典

教授 北村 聖

2012.6.19(火)～6.24(日)米国ボストンで開かれたThe New England Journal of Medicine(NEJM)の創刊200周年記念式典(The Joseph B. Martin Conference Center in Harvard Univ. School of Medicine)に出席してきた。シンポジウムは一日かけて、救急、がん診療など5つの話題について、当代の第一人者の基調講演とシンポジストの発表があった。シンポジウムは、雑誌のWEBに動画で配信されている。

NEJMのオリジナル論文の要約の日本語訳の監修をして15年になる。残念ながら、まだNEJMの事務所を訪れたことがなかったので、この機会に会社と編集部を表敬してきた。ビジネスを採配しているオフィスはボストン郊外の森の中にある5階建ての大きな建物である。NEJMの世界戦略、WEB戦略を考えているところで、日本の売り上げはそこそこのレベルにあるようであった。一方、NEJMの編集部は、Harvard大学の医学図書館の最上階にあり、人の出入りも厳重に管理されていた。特に、アクセプトされた論文がいつ載るかなどの編集スケジュールは極秘中の極秘であった。

ちょうど、日本からの論文が一つ採択されたということでお祝いを言われた。調べてもらったら2年ぶりということであった。日本の臨床論文が少ないといわれて久しいが、改めて実感させられた(写真はDrazen編集長と撮ったもの)。



▲ ボストンで、NEJMの編集長と

## マヒドン大学職員視察受け入れ

講師 大西 弘高

2012年5月15日、IRCMEではマヒドン大学熱帯医学部職員の視察を受け入れた。この大学は、熱帯医学や公衆衛生を中心に、国際的に多くの学生を集めており、大学としての今後の方針や対策を考える上で、参考にしたいというニーズであった。一行は15名で、代表者のMr. Sethavudh Kaewvisetは、医学系研究科国際地域保健学の神馬征峰教授と共同研究を実施している関係で、当センターのことも知っていたとのことであった。他の職員の所属は、総務、経理、資産管理、調達、人材、国際交流、研究協力、政策計画、教育サービス、教育テクノロジーなどにわたっていた。各自のニーズはかなり幅があると思われたため、基本的には当センターの活動内容を簡単に示した上で、各自の関心領域に関する質問を受けて情報提供していくような対応となった。

質問は、主に当センターの運営方針、事務管理における事務部門との関係、特任専門職員や技術補佐員、事務補佐員の位置づけ、運営資金の調達、教員や研究員の個人業績と部署全体でのとりまとめ、IT環境や教育・研究へのIT利用といった内容に及んだ。今後、東南アジアの学術的センターとしてタイが伸びていく可能性を感じた。



▲ マヒドン大学職員の皆さんと

## カザフスタン出張報告

講師 大西 弘高

私は、2012年7月3～14日の旅程で、カザフスタン国立医科大学（Kazakh National Medical University）の臨床スキルセンターに招聘され、訪問した。目的は、OSCEの質管理や研究に関する意見交換と、「医療者教育のトレンド」、「臨床教育改善」、「OSCE」の3つの講演であった。

イスラム教国家だが、旧ソ連の影響で女性は髪を出し、食事には豚肉や酒も出てくる。人種はモンゴル系、ロシア系、トルコ系などが混じり合っているが、元々のカザフ族は日本人とDNAが非常に近いと言われ、私も地元民と間違えられて何度も道を尋ねられた。言語はロシア語とカザフ語が半々。英語の必要性は急激に高まっているとのことであった。

OSCEについては、医学生が1,000人ぐらいいるため、5ステーション程度に留め、2列同時に実施したとしても、1日せいぜい200人で、5日ほどかかる。臨床スキルセンターのZaure Issina先生は日本人っぽい顔立ちの女性で、数名のスタッフを従えて、臨床スキル教育やその評価の切り盛りをしていた。日本製のシミュレーターも何台か設置されていた。石油によって経済が潤うこの国も、今後の展望として教育への注力を重視しており、医学教育ニーズが高まっていることが示唆された。



▲ カザフスタン医科大学の学生たち

## AMEWPR 出張報告

講師 大西 弘高

私は、2012年5月31日～6月2日に韓国カトリック大学医学部（ソウル）で開催された西太平洋地域医学教育連盟（Association for Medical Education in West Pacific Region）の会議に出席した。2010年より高麗大学医学部のDucksun Ahn教授が会長であり、日本からは国際関係委員会委員長の高岡俊正先生が代表として招聘されているが、2006～2008年の会議にお手伝いしていた縁で、私も継続的に出席させていただいている。

今回の会議での話題は、モンゴル保健科学大学にAMEWPRメンバーが招聘されて実施した外部評価、国際認証評価におけるAMEWPRの役割、公式学術雑誌、WHO（西太平洋地域事務所）との協調などであった。医学教育の国際認証評価に関しては、AMEWPRが以前から評価基準を培ってきたし、西太平洋地区での外部評価についての経験も少しずつ増えているため、近い将来日本国内で国際認証評価が盛んになっていく際に、知見を提供できる可能性が高い。

Ducksun Ahn会長は、それまで隔年開催であった会議を毎年開催に変更したが、この変化によって毎年各国の医学教育関係者と顔を合わせられるので、雰囲気是和やかになったと感じる。また、台湾が「Taiwan」の名称で正式に地域として加入したため、様々な情報がより早く入手できるようになった。



▲ Ahn 会長の講演

## WONCA 参加報告

講師 孫 大輔

去る5月24日～27日に韓国済州島にてWONCA(世界家庭医機構)アジア太平洋学術会議が開催され、当センターより大西講師と私が参加した。私は昨年、日本プライマリ・ケア連合学会認定 家庭医療専門医を取得したばかりであり、期待に胸をふくらませての初参加であった。

WONCA会長のRoberts先生の講演では、プライマリ・ケアのシステムの充実が、その国の患者満足度を高め、医療に費やされる時間や費用を削減し、死亡率を低下させるというエビデンスが示された。

大西講師は、医学教育のセッションで「家庭医療専門医試験における総括的評価ポートフォリオの実装」という口演発表を行い、ポートフォリオ評価に興味のある多くの医師からの関心を集めた。

私は「10分間総合スクリーニングによるプライマリ・ケア診療所における高齢者の老年医学的問題の早期発見の試み」というポスター発表を行い、現場からの臨床研究の意義を示した。

その他日本からは数十名の医師が参加し、多くの研究発表や報告が行われた。

この学会は他国の家庭医の現状を知る良い機会であり、各セッションや3日目のバンケット（晚餐会）を通じて、各国の医療制度の現状や家庭医の位置づけを知ることができた。



▲ WONCAでのポスター発表風景

## 中国福建省立病院看護管理者研修

教授 北村 聖・特任専門職員 田中 紫

2012年6月25日から7月20日までの約一か月に亘り、野口医学研究所ならびにNPO法人日本・中国看護師交流協会の働きかけにより、中国福建省立病院から師長クラスの看護師18名が来日し、看護管理能力の強化を目的に研修が行われた。本研修は研修参加者が2つのグループに分かれ、それぞれ2週間ずつ同じ内容のプログラムで実施された。研修の前半は日本における看護部の運営、人材育成、教育体制などについて学んでいたが、後半は実際に看護医療現場の見学が中心となった。

当センターとしては孫講師と北村がひとコマずつ講義を担当したが、今回の研修テーマが看護管理ということで、大半を東大病院看護部および健康科学看護学専攻老年看護学教室の方々にご担当いただいた。

研修中は常に通訳の方が同席し、日本語から中国語への通訳が行われた。日本と中国の医療や看護の違いに驚きをみせ、参加者どうしでの中国語によるディスカッションが始まることもあったが、自分の経験と知識を活かし、また管理者としての責任を持ちながら、全員が積極的に研修に参加しているという印象を受けた。

最後に、本研修の実施にあたりご協力いただいた多くの東大病院関係部署、外部機関の方々に深謝する。



▲ 中国福建省立病院看護管理者研修 第1班 研修員

## 第44回日本医学教育学会大会

教授 北村 聖

第44回日本医学教育学会が慶應義塾大学の主催で7月27、28日の両日、日吉キャンパスで開催された。恒例のことであるが、この学会の創設者のおひとりである、今年101歳の日野原重明名誉会長がお見えになり、公開講演会がおこなわれた(写真)。医学教育学会は会員数が2500名程度で、医学教育における教育方法、教育評価など全般に議論する目的で設立され、毎年7月の終わりに年次大会が開催されている。

第44回大会のテーマは「一身独立の若手医療人育成を目指して」で、末松会長の講演も同じ題名で行われた。「一身独立一國独立」は慶應義塾の創設者である福澤諭吉が遺した言葉で、文明は学塾の在り方、教育の在り方を「財の独立なくして学の独立なし」「半学半教」という言葉に集約していることからテーマにされたと聞いた。いろいろな話題が取り上げられていたが、医学教育の国際認証が新しいテーマであったように思う。プロフェッショナルリズム、参加型臨床実習なども大きな話題であった。

来年は7月26-27日に千葉大学の主催で開催される。



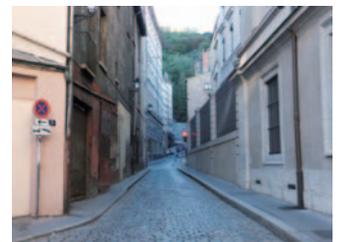
▲ 医学教育学会でスピーチする日野原重明先生

## ヨーロッパ医学教育学会2012

講師 大西 弘高

毎年8月末頃に開催されるこの学会は、世界医学教育連盟(World Federation for Medical Education)のヨーロッパ地域支部の位置づけにある。今年の学会は、フランス・リヨンで開催され、参加者3,000人という巨大な規模になった。特にタイから400人もの参加者が集まったと話題になっていた。日本からの参加者も、おそらく40数名に達し、これまでの中で最高だろうと思われる。私は、座長、研究委員会、学会誌「Medical Teacher」編集委員会などの業務もあったが、心音シミュレータ「イチロー」の独習ソフトウェアに関する口演を行い、一定の評価が得られたように感じた。特に、心音のタイミングを学習者が理解したかどうかに関して、マウスやカーソルをタイミング良くクリックしてもらうことで確認するという方法を、動画等で示したことがよかっただろうと思われる。

日本人参加者の多くは、恒例となりつつある夜の食事会に集まり、リヨン風のフランス料理を共に楽しんだ。リyonは、フランス第二の都市とのことだが、パリに比べてはるかに静かな雰囲気、フランスの地方のゆったりした文化を感じることができたのもよかった。来年はチェコ・プラハだが、今から準備しておきたいと思っている。



▲ リヨン旧市街の路地

## 臨床診断学実習(模擬患者による医療面接実習)

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

今年も例年のようにM2学生の「模擬患者による医療面接実習」が4月から毎週水曜日に実施されており、当センターは教材開発と運営に携わっている。

この実習は、ほとんどの学生にとって患者の立場の方を実際に相手にするという最初の機会であり、多くの学生が大変緊張感をもって望むこととなる。医学教育の立場からは、知識面だけではなく、臨床推論や対患者コミュニケーションという技能、そして医師としての態度の初歩を身につける、大変有意義な実習である。

模擬患者は訓練された方々であり実際の患者のように真に迫っている。学生はシナリオを知らないため、その場で症状などを聞き鑑別診断を考えながらの適切な質問を重ねると同時に、患者医師関係を構築するためのコミュニケーションにも留意しなければならない。

面接後は、まず、自分で感想を述べ、次に他の学生からのフィードバック、さらに、模擬患者からのフィードバックがあり、最後に担当教員からのフィードバックとまとめて終了となる。

今年の学生は、患者を安心させるような言葉がけやアイコンタクトなど、コミュニケーションに長けている人が多い印象である。模擬患者からのフィードバックだけでなく、同学年の他の学生からも意見をもらえることが学習モチベーションを上げているようだ。

良い医師となるための基礎的教育として、多くの学生に有意義な内容となるよう、今後も努力したいと考えている。

## 模擬患者つつじの会

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

2008年より本学と東京医科歯科大学とのコンソーシアムという形で模擬患者養成を行っている本会は、4月より新たな展開期を迎えた。本学の方で孫講師と新たに事務スタッフを1名迎え、また北村教授にも講義を行ってもらうなど直接的な関わりをして頂く体制になった。もう一つは、前号で2年ぶりに4期生となる模擬患者を募集中であることを報告したが、10人もの新規参加者を迎えたことである。養成コース(基本編)を受講した全員が8月の修了試験に合格し修了することができた。今回も3期生の養成コースのときと同様、先輩模擬患者も一堂に会する方法をとった。先輩模擬患者は、模擬患者としての心構えや必要な知識、演じ方、フィードバックの方法を復習するよい機会となると同時に、ファシリテーターの役を担うことができた。4期生からの質問を先輩模擬患者に聞いてみる企画もプログラムに取り入れ、率直な疑問点や不安を先輩の生の声から解決できるようにした。4期生は実際の医療面接実習に参加できるよう、後半の勉強会でさらに学んでいく予定である。今年度後半も模擬患者のさらなる質の向上を目指し企画を立てており、本会のさらなる発展に向けて努力して行きたい。



▲ 第4期生の修了式

# 東京大学医学教育セミナー

講師 大西 弘高

外国人客員教員によって開催されてきたセミナーを、月例の講演会として継続するようになって4年以上が過ぎた。「継続は力なり」という言葉があるが、広報の仕方などについては大幅な変更はしていないものの、徐々に参加者が増え、評判も上がっている印象である。2011年4月からは、講演者に同意を得た上で、USTREAMで中継配信すると共に、動画を継続的にWeb上で視聴可能にしているため、見逃した、忙しくて出席できなかったという方々にも、何らかの形で見ていただく機会が増えているようである。

第44回では、アウトカム基盤型教育を採り上げた。この概念はわが国でも徐々に認知されるようになり、モデル・コア・カリキュラムにおいても、採り入れられつつある。わが国で学内外にて継続的に取り組んで来られた田邊先生の講演は、他の施設、学問領域においても刺激になるものであった。

第45回は、豪州ニューサウスウェールズ大のかつてのRTTC（地域教員研修センター）について紹介していただいた。ここは、1970年代に日本の医学教育界の重鎮たちが、多数学んだ場所であった。ローテム教授の講演は、歴史的な経緯に再度スポットを当て、日本の医学教育の系譜を探る内容となった。

第46回は、英国でプロフェッショナルズム教育と関連づけて急速に広がって

る概念であるFitness to practise (FTP) を採り上げた。デヴィッド先生に多くの事例を紹介していただき、概念を具体的に把握できるようになった。

第47回は、岐阜県で地域医療に従事すると共に、多職種連携やその教育にも取り組んでおられる

吉村先生にお願いした。2010年に世界保健機関は地域での多職種連携に関する報告書をまとめているが、具体的にどのような取り組みが学ぶ側にとっても楽しく、ためになる体験になるかが理解しやすい内容であった。



▲ ローテム教授の講演

開催日	テーマ	講師
第44回 2012.5.22	アウトカム基盤型教育 ～千葉大学の取り組み～	田邊 政裕 千葉大学医学部附属病院・総合医療教育研修センター長 千葉大学大学院医学研究院医学部・医学教育研究室室長
第45回 2012.6.13	医学教育の推進において学んだこと ～RTTCでの経験～	アリー・ローテム 豪州ニューサウスウェールズ大学 名誉教授
第46回 2012.7.25	学生のFitness to Practise (FTP) ～不祥事や健康問題とその結果～	ティム・デヴィッド 英国マンチェスター大学医学・人間科学部 教授・学生FTP主任
第47回 2012.9.18	地域での多職種間連携教育 (IPE) ～ごちゃまぜにすると楽しい、地域医療のウラ技～	吉村 学 揖斐郡北西部地域医療センター長 医師

# 医学教育基礎コース

講師 孫 大輔

昨年からはまった医学教育基礎コースは、本学医学部のFaculty Development（教員能力を高めるための実践的方法）の一環として、医学部教員（特に中堅～若手教員・新任教員）を対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。昨年度はほぼ毎月1回実施し、学外からの参加も可能とし、毎回10名前後の参加者で計11回行い、好評を得ている。

今年度も計9回の講義を予定しており、すでに第1回講義「よい教員の資質:教育理論との関連」（大西講師）、第2回講義「魅力あるレクチャーの方法」（北村教授）が行われた。第1回、第2回とも基礎および臨床医学系の若手～中堅教員11名が参加した。講義はスモール・グループ・ディスカッションやロールプレイなど参加型の形式もおりませ、楽しく学べるようになっている。

第2回講義「魅力あるレクチャーの方法」では、眠くならないレクチャーのポイントとして、「適切な内容とボリューム」、「全体像とゴールを示す」、「インタラクティブに進める」、「話し方の工夫」といったポイントが解説され、それにそって、3人一組となり3分間で自分の好きなテーマについてミニレクチャーをするというロールプレイが行われた。こうしたロールプレイが講義全体の中で3回行われ、受講者は最後まで文字通り「眠くならない」（気を休めることができない）講義を体験した。受講者のアンケートでは「（従来の自分の講義が）多くを伝えようとして、スピードが

学生に合っていなかったことに気づいた」、「講義の前に必ずゴールを示すことが大切と気づいた」などの感想が寄せられた。

以降も、第3回「研修医をどうやって教える?」（9月11日）、第4回「臨床能力の評価」（10月9日）、第5回「MCQ形式の問題の作成の仕方」（11月12日）、第6回「ワークショップとは?」（12月11日）、第7回「臨床推論の教育」（1月8日）、第8回「プロフェッショナリズムの教育」（2月25日）、第9回「コミュニケーション能力をいかに教えるか」（3月12日）、といった内容を予定している。

肩肘張らず、楽しく学べる内容となっており、新任教員の方から、ベテラン教員でも改めて教育の基礎を学びたい方まで、基礎系・臨床系を問わず多くの先生方の御参加をお待ちしています。学内の方の参加費は無料（学外の方は1000円）、医学図書館3階研修室にて、毎回18:00～19:30の予定。問合せは、TEL: 03-5841-3583 あるいは sond-tky@umin.net（担当:孫）まで。



▲ グループディスカッションの風景

## 着任あいさつ

講師 孫 大輔

みなさま、はじめまして。

4月より当センターに錦織宏先生の後任者として着任しました孫大輔と申します。どうぞよろしく申し上げます。

私は平成12年に本学医学部を卒業し、内科研修を経た後、腎臓内科に進みました。平成16年に本学大学院博士課程に進み、慢性腎臓病と低酸素・酸化ストレスの関連をプロテオミクスにて探索するという興味深い研究テーマに従事し、成果を発表することができました。これも研究指導者であった南学正臣先生に、研究の基礎から醍醐味まで教えていただいたお陰であり、心より感謝しております。大学院時代の基礎研究は大変面白かったのですが、自分の興味は「人間そのものを科学する」という方向に向き始めました。その頃、総合診療・家庭医療といった臨床分野と出会い、腎臓内科医からジェネラリスト（総合医）へ転向しようと決意するに至りました。平成20年より日本プライマリ・ケア連合学会認定の後期研修プログラムに入り、若い医師たちと一緒に研鑽を積みました。このプログラムでは大変良質な教育環境に恵まれました。プログラム責任者の藤沼康樹先生が医学教育に造詣が深く、頻繁なreflectionとfeedbackの機会、ポートフォリオ型学習などを経験することができました。特に藤沼先生から教わったドナルド・ショーンの「reflective practitioner（省察的実践家）」の概念は心に刻み込まれています。

同時に臨床研究の面白さに目覚め、様々な研究ワークショップなどに参加し、疫学研究や質的研究の方法論の基礎を学ぶことができました。そして、自分の目指すべき道はAcademic GP（研究を主に行う総合医）であると考えようになりました。



そうした中、医学教育と臨床研究の両方に携わることができる当センターに今年度から着任することとなり光栄に感じるとともに、錦織先生の後任としての役割が果たせるのかと身の引き締まる思いです。

すでに、来年度から始まる参加型臨床実習ワーキンググループ、模擬患者つつしの会、医学教育基礎コースなど重要な仕事にいくつか関わらせてもらっています。学部生や教員の先生と交流する機会が増え、教育の楽しさ、教育の重要性を改めて日々感じております。

本学の医学教育が、真のリーダーシップをとれる医師・研究者を涵養できるように、少しでもお手伝いできるように努めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

## ウォン先生自己紹介

特任教授（2012.10.1-2013.3.29） Jeffrey G. Wong, MD, FACP

Greetings to you all! I am Jeff Wong and I am incredibly excited and deeply honored to be selected as a visiting professor at the IRCME. By way of background, I am of Japanese and Chinese descent, a practicing Primary Care Internist, and have experience and long-standing interests in Faculty Development, curriculum design, and clinical medical education for medical students and internal medicine residents. I am a trained facilitator in Clinical Teaching Skills by the Stanford Faculty Development Center and have been fortunate enough to do faculty and resident development work throughout the USA as well as internationally in Russia, China, Spain, France and Singapore. In my previous role as the Senior Associate Dean for Medical Education at the Medical University of South Carolina (MUSC), I had a broad scope of educational responsibility through administering and overseeing undergraduate (medical students), graduate (residents), and continuing (faculty) medical education. Thus, I have experience throughout the spectrum in medical education; from one-on-one teaching sessions to small group workshops to large plenary lectures and to the institutional “big-picture” perspective necessary for success as a leadership level.



I view my visit to the IRCME as an incredible opportunity for personal growth by learning about Japanese culture and the conduct of Japanese medical education. Professionally, I hope to establish opportunities for collaboration with medical educators at the University of Tokyo, the IRCME, and throughout Japan who might share similar interests. Additionally, I hope to learn a bit about the operations of the IRCME. MUSC is in the early planning stages for an International Health initiative and I believe that my experience with the IRCME could benefit my home institution. I also hope that sharing my personal experiences in clinical teaching and organizing medical education will prove beneficial for you and your efforts to continually improve and adapt clinical training and medical education to meet societal needs in Japan.



東大医学図書館前のヒボクラテスの木（撮影 北村 聖）

## ●センター日誌 | 2012年4月～9月 |

<b>4 APR</b>		25日(～7月6日)	中国福建省立病院看護師第1班研修受け入れ (主催：野口医学研究所)
(3月19日～)11日	モンゴル国保健セクター情報収集・確認調査 第1次活動(大西)	27日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
11日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・健康講座	<b>7 JUL</b>	
16日	孫大輔講師 着任	9日	第2回医学教育基礎コース「魅力ある レクチャーの方法」(北村)
22日～28日	サウシ国際医学教育学会招聘参加(大西)	9日～20日	中国福建省立病院看護師第2班研修受け入れ (主催：野口医学研究所)
<b>5 MAY</b>		18日	平成24年度第1回運営委員会
2日～12日	モンゴル国保健セクター情報収集・確認調査 第2次活動(大西)	3日～14日	カザフスタン国立医科大学招聘訪問(大西)
9日	臨床診断学実習 (模擬患者による医療面接実習総論)	25日	第46回東京大学医学教育セミナー (マンチェスター大学医学・人間科学部 ティム・デヴィット教授)
15日	タイ国マヒドン大学熱帯医学部職員視察 受け入れ	25日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・シナリオ アレンジメント
16日	臨床診断学実習(カルテの書き方)	26～28日	第44回日本医学教育学会大会出席 (北村・大西・孫・澤山)
22日	第44回東京大学医学教育セミナー (千葉大学大学院医学研究院医学部・ 医学教育研究室室長 田邊政裕教授)	<b>8 AUG</b>	
23日(～10月3日)	臨床診断学実習 (模擬患者による医療面接実習)	29日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会
24日～27日	世界一般医・家庭医学会 アジア太平洋学術 会議参加(大西・孫)	25日～29日	欧州医学教育学会大会出席(大西)
29日	「模擬患者つづきの会」定期勉強会・ シナリオアレンジメント	30日(～9月3日)	アジア太平洋医学雑誌編集者会議2012出席 (北村)
31日	インドネシア国イスラム大学教員来訪・ モニタリング	<b>9 SEP</b>	
31日(～6月2日)	西太平洋地域医学教育連盟会議出席(大西)	1日～2日	日本プライマリケア連合学会学術大会出席 (大西・孫)
<b>6 JUN</b>		7日(～11月30日)	M2 PBL チュートリアル教育
12日	平成24年度第1回医学教育基礎コース 「よい教員の資質:教育理論との関連」(大西)	11日	第3回医学教育基礎コース 「研修医をどうやって教える?」(孫)
13日	第45回東京大学医学教育セミナー (ニューサウスウェールズ大学 アリー・ローテム名誉教授)	18日	第47回東京大学医学教育セミナー (揖斐郡北西部地域医療センター長 吉村学医師)
18日～27日	モンゴル国保健セクター情報収集・確認調査 第3次活動(大西)	19日	臨床診断学実習 (New England Journal of Medicine を 用いた診断推論)

### 編集後記

厳しかった残暑の記憶を吹き消すかのように、月夜に鳴く虫たちの声が秋の訪れを知らせてくれます。平成24年度上半期の活動記録を編集するなかで、国際色豊かな当センターがますます地平を広げているのを改めて感じました。医学教育セミナーや医学教育基礎コース、臨床診断学実習などの教育啓蒙活動では学内外の多くの方々にご協力とご指導をいただきました。また新しいメンバーを迎え、さらに充実した活動を目指して、センター教職員一同邁進して参ります。次号No.23は来春発行の予定です。どうぞお楽しみに。(み)

### 発行元

発行 2012年9月30日  
 発行人 山本 一彦  
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター  
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254  
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp  
 http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp  
 印刷所 株式会社トライ